

伝統の技を
いつまでも残したい



中根 三男さん
(長谷町・66歳)

厳しさは思いやり

新年を迎えるに当たり、日本では門松やしめ飾りを飾るのが恒例となっています。皆さんの家ではいかがでしょうか。数年前までは、鳶や植木職人がお得意先からの依頼で飾り付けにまいりましたが、現在では門松を飾る家も少なくなり、風情のない正月になってきたように感じます。古河市では、主に古河鳶一番組の方々が門松やしめ飾りをつくっています。そこで今回は、古河鳶一番組組頭の中根三男さんを訪ねました。

「今は鳶職と言われますが、昔は仕事師と言われていました。各町内の番屋（現在の会議所）に住み、仕事をしながら番屋の管理や自治会内の行事、冠婚葬祭なども手伝っていたそうです。古河の夏祭り（ささら獅子舞）などで自治会の先導役（金棒引き）を務めるのも、その経緯からです。また、火災の時はすぐに手とびを持って現場に行き、家や財産を守るために消化作業をするのも仕

ぶんがくかん発
Vol.64

「武井武雄」“おとぎの国の王様”が追究した表現技法

“Vari-type”、“Tandem Print”、“Sベランのゴブラン織”...

ちょっと聞き慣れない言葉を並べましたが、いずれも、武井武雄が「刊本作品」で用いた彼自身の創案による版画様式です。刊本作品は武井のライフワークとして、約半世紀にわたり139冊刊出されました。通常の版画様式はもちろんのこと、彼が創案した様式、それらの組み合わせを含め、およそ100種類の印刷・版画様式が用いられています。

ところで、武井武雄といえば、「童画」の生みの親であり、ご承知のように、古河出身の鷹見久太郎が創刊した「コドモノクニ」で絵画主任として活躍しました。また、版画、郷土玩具しゅうしゅうの蒐集、創作玩具の製作と、その活動は多岐にわたっています。加えて、武井は言葉に対して独特のユーモアセンスをもっており、「ラムラム王」「あるき太郎」などのナンセンスものを中心とした童話作家でもありました。

画であれ、話であれ、武井の作品は見るものを空想の世界へといざなう不思議な魅力にあふれて

います。“おとぎの国の王様”と称されるゆえんです。そして、彼の作品に漂う幻想性はさまざまな表現手段に支えられていると言っても過言ではありません。

幼少期、病弱でしかも一人っ子という孤独裡に育った武井は、空想の世界で「ミト」という妖精を創り出して遊んでいました。この幼き日々の空想世界の再現こそ、武井の創作活動の根底にあったのではないのでしょうか。言いかえれば、彼は空想を現実に表現するために、あらゆる表現技法を追究したのでしょう。必要とあらば、新たな技法を生み出しさえしたのです。

刊本作品は、素材、デザイン、版画様式、話の内容と、「本」の表現要素すべてに対する冒険でした。おとぎの国の王様は、その中であらゆる技法の可能性をさぐっています。

そして、それらを究めた結晶こそ、「刊本作品」そのものだと言えましょう。

(テーマ展「武井武雄刊本作品の世界 其の参」は1/5～2/27まで開催)



刊本作品の世界 其の式より